

アフリカほど、人間社会と国際社会のもろさを映し出してきた地域はない。貧困、エイズ、内戦、破綻国家、難民、テロ……。冷戦時代も冷戦後もこの大陸では民族虐殺が起こった。いまもここで世界の「底辺の10億人（ボトム・ピリオン）」のほとんどの人々が生存と戦っている。

アフリカには最近、もう一つの顔があるので。石油・ガス・レアメタル産出、中国、インドの進出、成長への離陸など、アフリカはビジネスとなりつつある。ただグローバル化の過熱の中で、それは国内の富と所得の格差をさらに広げる。地球温暖化と食糧暴発と貧困と紛争が玉突きのようにぶつかり、危機をはじき出す。

今週横浜で行われた第4回アフリカ開発会議（TICAD）は、日本がアフリカとそれらの課題とともに議論し、対応を追求した。

ただ、豊かな国の為政者は、国

私たちもアフリカ人

本社主筆 船橋 洋一

民の次のような漠とした疑問にどこまで答えているだろうか。

「遠いアフリカの問題がなぜ、それほど重要なのか」

むしろその挑戦に現場で、日々、取り組んできたのは、TICADに結集した数多くのNGOの人々である。なかでもU2のロック歌手、ボノの果たしてきた役割は大きい。朝日新聞は今回、ボノとボブ・ゲルドフ氏を一日編集委員に迎え「アフリカ特別紙面」を組んだ。

ボノは、日本の対アフリカODA倍増の中身に物足りなさを表明しつつ、日本がかつてアジアに対して、教育、農業、道路などのインフラづくりに地道に取り組んできたことを特筆し、その経験をアフリカにも生かしてほしいと訴えた。「インフラはセクシーではないと見なされているが、いまは思ったよりセクシー」と言う。日本は、援助倍増の数字の内実とも

に、援助の理念を普遍化する知的、外交的な指導力が問われている。

「いま、私たちはみんなアフリカ人」

私はボノたちと会った後、彼らが口にする、そのような言葉をしばしば反芻した。恐らくそれは、アフリカが私たちを必要としているように私たちもアフリカを必要としているという共通利益の感覚なのだろう。中国のアフリカ進出はそれを私たちに感じさせた。目覚まし時計に違いない。

同時に、その裏に潜むもう一つの感覚、つまりはもろさの感覚をも私たちはアフリカと初めて共有しつつあるのではないか。子供のいのちを救い、教育の機会を与える、地球温暖化を止める、部族、民族、宗教、国家の壁を乗り越える。そうしてこそ成り立つ世界の未来は、アフリカの開発と平和の行方にかかっている。